

古代山城の城門構造～九州を中心に～

九州歴史資料館 吉田東明

1. 九州の古代山城

7世紀の東アジア情勢

古代山城とは、我が国の飛鳥時代から奈良時代頃にかけて、西日本各地の山に築かれた城郭施設の総称である。

7世紀前半、朝鮮半島は高句麗・百濟・新羅の三国鼎立状態にあった。618年に統一帝国を形成した唐は640～650年頃に全盛を迎える。各方面への侵略を企てるようになる。645年に新羅の救援要請を受けた唐は朝鮮半島に直接介入し、唐・新羅連合軍は660年に百済の都、泗沘（しひ・サビ）城を襲い百済を滅亡させた。

百済の遺臣たちは復興のための援軍を倭国に要請した。齊明天皇は救援のための援軍派遣を決定し、齊明七年（661）に筑紫に遷居するが（朝倉橋広庭宮）、当地にて死去する。中大兄皇子は称制という形で大王位を代行して派遣軍を渡海させ、天智二年（663）に白村江にて唐・新羅連合軍と会戦したが、大敗を喫する結果となった。

白村江の戦い後、倭国に対して唐が新羅と連合することなく、やがて唐・新羅両国は対立関係に陥る。天智七年（668）に唐は高句麗の内紛に乗じて高句麗を滅ぼしたが、同年、新羅と倭国の復交がない、両国の緊密な交流が行われることとなった。天武五年（676）年には唐が遼東へと退却し、新羅は朝鮮半島統一を果たしたのである。

日本の古代山城

天智二年（663）年の白村江での敗戦後、倭国は唐・新羅の侵攻に対する防衛体制の緊急整備が国家的急務となり、このことが山城築造の直接的な契機になったとみられる。『日本書紀』によれば、白村江敗戦翌年の天智三年（664）に対馬・壹岐・筑紫国等に防（さきもり）と烽（とぶひ）を置いて筑紫に水城を築き、さらに翌天智四年（665）には長門国に城を築き、また、百済亡命高官の達率憶禮福留（おくらいふくる）・四比福夫（しひふくぶ）を筑紫国に遣わして大野・椽（き）（基肄）の二城を築かせている。さらに、天智六年（667）には倭の高安城・讚岐屋嶋城・対馬金田城を築く。天智三年（664）以降、矢継ぎ早に行われた防衛体制の構築過程をみると、まずは筑紫国までの情報伝達手段を整備し、次に大宰府を中心とした防衛網を整え、さらに都に至るまでの海路沿いの要衝に拠点となる山城を築



7世紀前半頃の東アジア状勢

き、防衛体制を構築していった様子がうかがわれる。

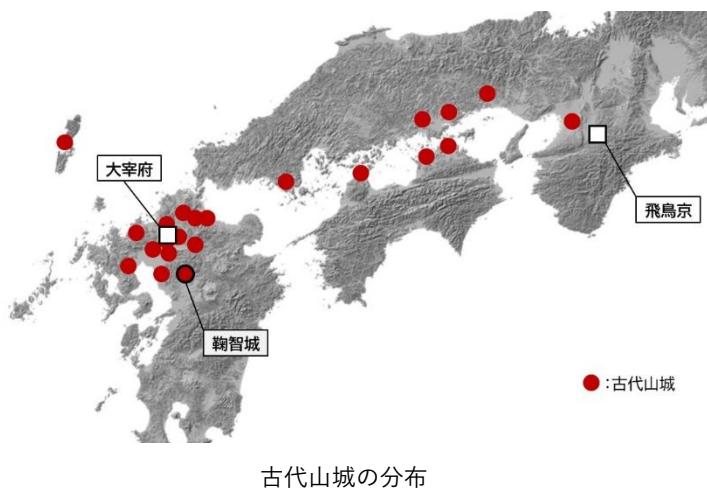
現在までに西日本の各地で見つかっている古代山城は、22ヶ所を数える（怡土城を除く）。これらのうち、『日本書紀』や『続日本紀』に登場する古代山城は6ヶ所あり、これらは「朝鮮式山城」と呼ばれている。また、記録には登場しないが遺跡として確認されている古代山城も16ヶ所あり、これらは「神籠石（こうごいし）式（系）山城」と呼ばれてきた。「朝鮮式山城」と「神籠石式（系）山城」には構造上の共通点も多く、築造時期も近接すると思われることから「古代山城」と総称されている。なお、文献史料に登場するが所在が分からぬ山城も5ヶ所ある。

さらに、近年では新たな古代山城（長者山城、他）発見の報告もある。

九州の古代山城

古代山城は、九州北部から瀬戸内海沿岸を経て畿内に至るまでの間の、陸上・海上交通の要衝に置かれており、特に九州の北・中部には古代山城が集中して分布する。その数は14ヶ所を数え、我が国の古代において、内政・外交・軍事の面で重要な役割を果たした「大宰府」の擁護が、国防上の最優先事項だったことがわかる。

大宰府は周囲を山々に囲まれた天然の要害の地にあり、北に位置する四王寺山には大野城、南の基山には基肄城、北西の福岡平野へと続く狭い平地部には、そこを塞ぐように水城が築造された。筑後平野に面した東側には阿志岐（あしき）山城が築かれた。さらに、水城の北西には小水城と呼ばれる小型の土塁が3ヶ所で見つかっており、また、基肄城の東側でも小水城に類似する土塁が2ヶ所確認されている。このように、大宰府の周囲には、一連の大宰府防衛構想に基づいて要衝に山城や土塁を築造し、自然地形と一体となって「大宰府外郭線」の形成が行われた。また、大宰府外郭線のさらに外側、各地域で交通の要衝となるような場所にも古代山城が築造された。



古代山城の分布



九州の古代山城の分布

2. 古代山城の築造時期

古代山城一覧

※名称は○○城で統一

	名称	旧国	石材加工	標高（峻/緩）	城門（平/懸）
1	大野城	筑前	野面	410m（峻）	9カ所（平・懸）
2	基肄城	肥前	野面	416m（峻）	4カ所（平？）
3	金田城	対馬	野面	276m（峻・緩）	4カ所（平・懸）
4	屋嶋城	讃岐山田郡	野面	292m（峻）	1カ所（懸）
5	高安城	大和		488m（峻）	
6	鞠智城	肥後	野面	169m（緩）	3カ所（平・懸）
7	阿志岐城	筑前	切石	339m（峻）	
8	雷山城	筑前	切石	483m（峻）	
9	鹿毛馬城	筑前	切石	70m（緩）	
10	杷木城	筑前	切石	130m（緩）	
11	高良山城	筑後	切石	252m（峻・緩）	
12	女山城	筑後	切石	202m（緩）	1カ所
13	御所ヶ谷城	豊前	切石	247m（峻）	7カ所（平）
14	唐原山城	豊前	切石	73m（緩）	
15	帶隈山城	肥前	切石	174m（緩）	1カ所（平）
16	おつぼ山城	肥前	切石	66m（緩）	2カ所（平）
17	石城山城	周防	割石	350m（峻）	2カ所（平）
18	永納山城	伊予	割石	128m（緩）	2カ所（平？）
19	讃岐城山城	讃岐	野面	462m（峻）	2カ所（平）
20	鬼ノ城	備中	割石	403m（峻）	4カ所（平・懸）
21	大廻小廻城	備前	割石	198m（峻）	3カ所？
22	播磨城山城	播磨	野面	458m（峻）	1カ所（平？）

亀田修一 2016・向井一雄 2019 をもとに作成

古代山城の分類

これまで、わが国の古代山城は「朝鮮式山城」と「神籠石式（系）山城」の二つに分類されてきた。「神籠石」とは本来、列石のことではなく磐座（いわくら）や神体石の一種のことを指す名称である。久留米市の高良山にある列石線が「神籠石」と紹介されたことがきっかけで、その後、同様の列石線に対しても「神籠石」呼ばれるようになったが、高良山にある「神籠石」とは、本来、高良大社参道にある「馬蹄石」のことを指す。また、わが国の古代山城は怡土城（756年築城）を除くすべてが朝鮮半島に技術的系譜を持つ構造であるため、その意味ではすべてが「朝鮮式山城」である。

従来は、文献に記載のない古代山城に対して「○○神籠石」という名称で史跡指定が行われた経緯があったが、近年では「○○山城跡」という名称が付されるようになってきた。また、古代山城に対する調査研究が進展した現在では、両者の線引きがそれほど明確ではないということも分かってきた。

構造の違い

古代山城の分析視点は多岐にわたるが、ここでは、古代山城が築かれた地域、占地（嶮しい／緩やか）、石材加工、門の構造、を対象とする。

九州北部地域には、多数の古代山城が集中している。この分布状況から、九州北部地域を対外防衛の前線として位置付け、ここから瀬戸内海を経由して畿内に至るまでの要地に山城を配置するという全体的な防衛構想だったことがわかる。

文献に記載のある諸城（朝鮮式山城）のうち、金田城は対外防衛の最前線として、大野城と基肄城は大宰府の防衛を主目的として配置されたことはまず疑いない。屋嶋城や高安城は実態が不明確な点が多いが、屋嶋城は瀬戸内海の要衝として、高安城は畿内防衛の最終防衛線の役割を担っていたものとみられる。鞠智城については、大宰府から遠く離れ、また内陸部に位置するため対外防衛の意図を汲み取ることが難しく、様々な見解が出してきた。

文献に記載のない諸城（神籠石式系山城）のうち、筑前が4ヶ所と多いのは、やはり筑前地域に防衛すべき拠点が置かれていたことを意味する。筑後・肥前・豊前は各2ヶ所、それ以外の地域に関しても1～2ヶ所の割合で設置される。九州北部の諸城は、すべてが大型の石材を整美に加工した、切石による列石線を伴っていることが大きな特徴で、対して瀬戸内海沿岸の諸城は割石・野面石材の使用が多い。この点では瀬戸内海沿岸の諸城は、大野城・基肄城・金田城・鞠智城など文献に記載のある城と近い関係にあると言える。

諸城が置かれた標高（占地）に関しては、瀬戸内海沿岸の諸城は標高が高く嶮しい場所に築かれる傾向にあるのに対し、九州北部の諸城では低くてなだらかな場所に築かれているものが複数ある。この点については、防衛を目的として設置されたというよりも、すぐ近くを通る駅路から見えることを意図した、いわば「見せる」ことを目的に設置された城として理解されている。

城門については、入口に段差がない平



阿志岐山城の基底部列石



鹿毛馬城

門（ひらもん）構造と、段差のある懸門（けんもん）構造の二種類がある。狭くて段差のある懸門の方が出入りしにくく、より防御性の高い構造と言える。懸門の所在が知られる大野城・金田城・屋嶋城・鬼ノ城はどれも標高の高い場所に築かれており、防御性を重視したための懸門構造の採用とみられる。これに対し、鞠智城を除いて、標高の低い場所にある諸城には懸門構造は採用されていない。

古代山城の造営時期

大野城・基肄城の築城は白村江敗戦から間もない天智四年（665）、金田城・屋嶋城・高安城は天智六年（667）であることが『日本書紀』の記載内容から知られているが、これを築城の開始年とみるのか完成年とみるのかで築造契機に関する認識が大きく異なってくる。また、文武二年（698）繕治の記事から鞠智城の築城もほぼ大差ない時期とみられている。

従来、文献に記載のない諸城に関しては、文献に記載されなかったのは既に忘却されていたため、というように理解して、文献に記載された諸城よりも古くみる傾向にあった。

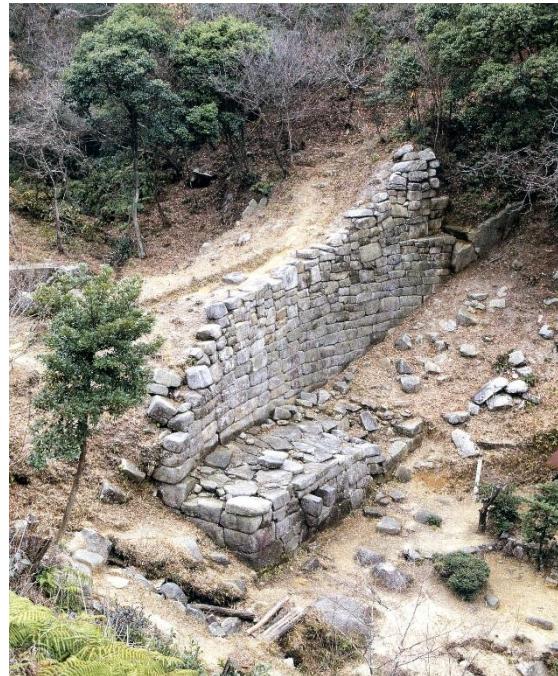
雷山城（雷山神籠石）の調査所見に基づき「愚城」と称した原田大六は、敏達十二年（583）の日羅の奏言にある、要害の地に築くべき「壘塞」を神籠石の築城記事に想定していた。鏡山猛は、おつぼ山城の調査で検出された列石前面柱の柱間間隔が 3m であることを根拠に「唐尺使用」、つまり大化改新の 645 年以降と理解した。これには切石による構築技法が終末期古墳にも共通するとみる斎藤忠の見解も補強材料となった。

よく知られた言説に、渡辺正気の「齊明天皇西下時築城説」がある。これは、齊明四年（660）の「是に由りて国家（くに）、兵士甲卒（いくさびと）を以て西北（いねい）の畔（ほとり）に陣（つら）ぬ」「城柵（さかき）を繕修（つくろ）い山川を断ち塞ぐ兆しなり」の記事を、齊明の西征と山城築造を指したものと解釈する説である。

その後、考古学的見地からの分析が進展し、現時点では、文献に記載のない九州の諸城を、記載のある諸城よりも概ね後の時期に置く見解が優勢になりつつある。



鹿毛馬城の列石



御所ヶ谷城 中門

帶隈山城では、6世紀代に製作されたとみられる陶棺を破壊して列石線が構築されており、女山城では城内に後期群集墳が構築されていることから、6世紀末よりも遡ることはないともい。また、出土土器による年代観では、多量の土器が出土したことから鬼ノ城の築造・維持年代が7世紀第4四半期を中心とすることが明らかになった。その他にも、時期比定の難しい破片資料のため決定的な根拠とはならないが、御所ヶ谷城第2水門の発掘調査では7世紀第4四半期頃の須恵器長頸壺片が出土、鹿毛馬城暗渠裏の水溜遺構でも7世紀頃の須恵器甕片が数点出土している。

占地や石材加工法、懸門構造の採用といった点において、大野城や基肄城、金田城と瀬戸内海沿岸の諸城は近い関係にあり、出土土器の年代観では鬼ノ城を大野城・基肄城・金田城よりも少し後の時期に置くことができる。

文献に記載のない九州北部の諸城をすべて同一時期とみる必要はなく、段階的に造営されていったとみた方が現実的ではあるが、構築技術や切石加工の共通点をみると、これらの諸城はかなり近い時期に築かれたものと考えられる。防衛面よりも示威性を重視して「見せる」山城を設置した背景には、逼迫した臨戦状況を脱した後の、新羅との関係が改善した後の時代背景を反映したもの、と理解した方が理に適っている。

九州北部の諸城の中に、駅路から見える側にしか城壁が築かれていない城や、丁寧に加工された列石はあるが土塁の構築がない、「未完成」としか考えようのない城が複数見られるのは、中央政権の防衛構想の転換や、体制の再編に基づくものとみられ、このような点でも文献に記載のない九州北部の諸城は、全体的傾向として新しく位置付けられる。

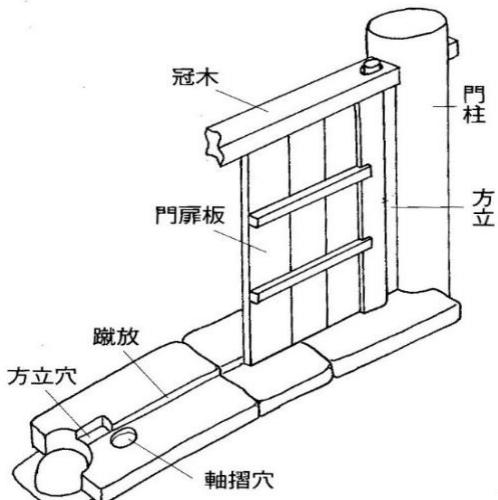
3. 古代山城の城門構造

古代山城の城門

官衙に対して古代山城の門は防御的侧面を重視して構築する必要があり、そのため官衙の門と違って間口が狭く、堅牢に構築される傾向にある。

古代山城の門には、段差がなく水平または傾斜した坂道に造られる「平門」と、大きな段差があり梯子等を使用して出入りする構造の「懸門」がある。

大野城の場合、太宰府口城門は平門だが、クロガネ岩城門や北石垣城門は懸門となることが発掘調査によって明らかになった。クロガネ岩城門や北石



門の構造（山田隆文 2011）

垣城門は、門から城内に入るとすぐ山の斜面に直面するため、必然的に曲がって進入せざるを得ない。平門構造の太宰府口城門でも、門の内側に板塀のような遮蔽物を設置しており直進できない構造を採っている点では同様である。

古代山城では門の下部に石製の門礎石（門礎・唐居敷（からいじき））を設置することが多く、官衙では石製の門礎石を使用せず、木製が一般的だったようである。文献に記載のない九州北部の諸城で門礎石が見つかっているものではなく、懸門構造の採用が確認された例もない。この点において、文献に記載のある諸城との構造的差異は顕著である。

古代山城の門礎石にはさまざまな形状がある。形状の差異については、これが時期的な変遷を示すと解釈する見方と、故地である朝鮮半島の系統差に基づくと解釈する見方がある。

大野城の城門

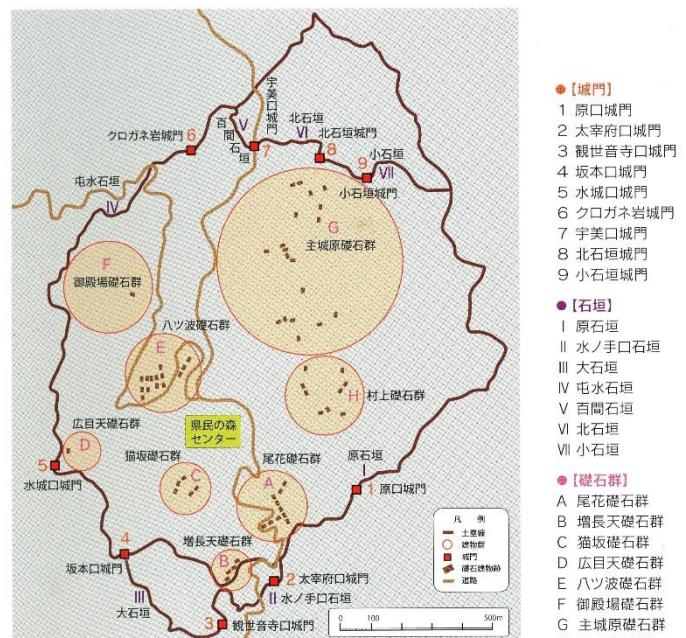
大野城の大宰府口城門では、7世紀後半から8世紀にかけて三期にわたる変遷が知られている。

第Ⅰ期（7世紀後半）：掘立柱建物で八脚門に近い構造となる。門幅9.3m。

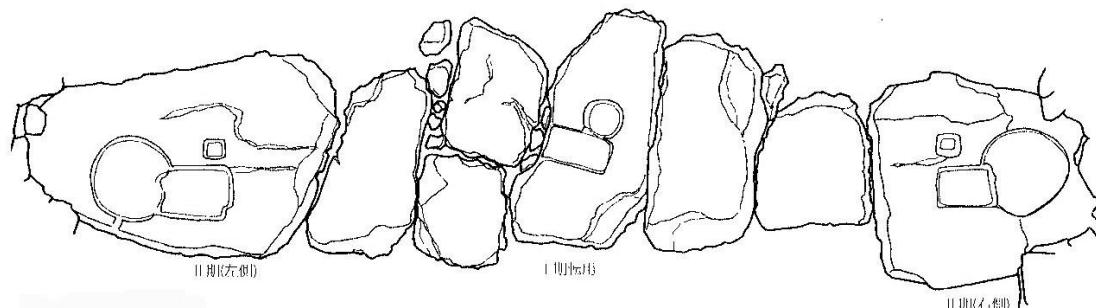
第Ⅱ期（8世紀前半）：瓦葺き礎石建物。地覆石にⅠ期門礎石を転用。門幅5.2m。

第Ⅲ期（8世紀後半以降）：瓦葺き礎石建物。門道側壁の石垣を修復。

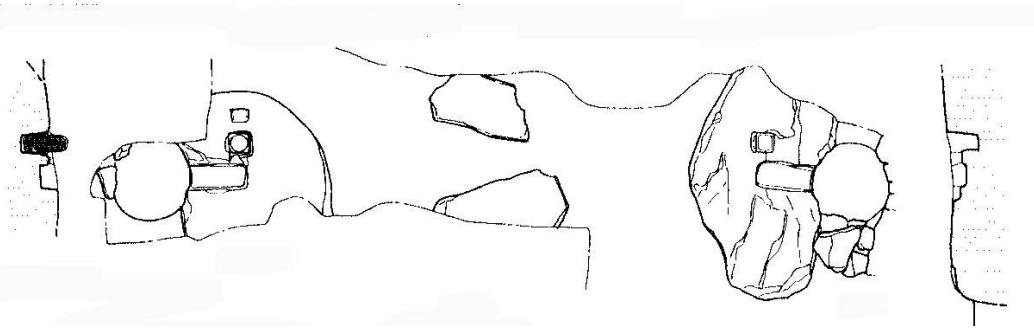
I期の門礎石は掘立柱に添えるための円弧状の割り方を設け、方立穴（ほうだてあな）と円形の軸摺穴（じくずりあな）を備える。両側にあるII期の門礎石には柱を据えるための円形の柱座（はしらざ）があり、方立穴と小型方形の軸摺穴を有している。大野城ではこれら



大野城跡



太宰府口城門の門礎石／大野城



北石垣城門の門礎石／大野城

以外にも形状の異なる門礎石が確認されているため、それらの差異を時期的変遷とみるのか、それとも技術集団の系譜差に基づくとみるのかで意見が分かれている。

大野城 北石垣城門

北石垣城門の門道は、城外側で幅 4.7m、城内側で幅 4.1m を測り、外側へと少し開いた形状となる。門道の両脇に立てられた柱に接する位置で、それぞれ門礎石が据え置かれた状態で見つかった。門礎石は柱に沿って円弧状の割り方があり、方立穴と方形の軸摺穴が割り込まれていた。これら二つの門礎石のうち、東側の軸摺穴には鉄製の軸摺金具（じくずりかなぐ）が嵌め込まれた状態で見つかった。

城門のすぐ外側には石垣が築かれ、さらにその外側には平坦面がある。平坦面と城門床面とは 1.5m ほどの比高差があることから、この北石垣城門は懸門構造であることが分かった。

水城 西門

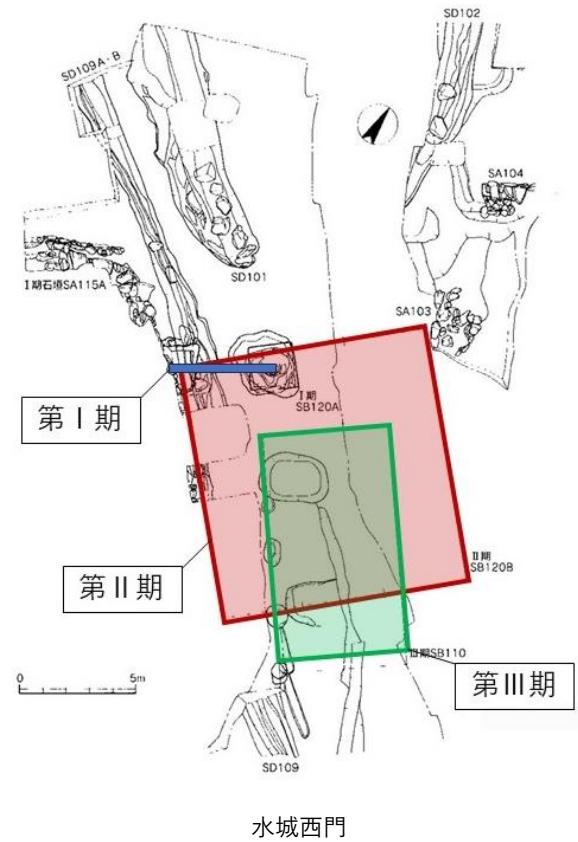
水城は東西に門が設けられ、福岡平野と大宰府とをつなぐ直線的な道路（官道）がそれぞれ通過していた。西門は発掘調査の結果、7世紀後半から 8世紀にかけて三期にわたる変遷が確認された。

第Ⅰ期 (7世紀後半)：掘立柱建物で 2 本柱、門幅 4.2m と推定される。通路壁面には石垣積みが行われている。

第Ⅱ期 (8世紀前半)：瓦葺き礎石建ちの八脚門で、門幅 11.5m（中央幅 4.5m）を測る。

第Ⅲ期 (9世紀)：瓦葺き礎石建ちの四脚門。門幅 5.4m の重層門に復元される。

変遷の過程をみると、第Ⅰ期は 2 本柱の簡素な造りで門幅も狭く、側面に石垣を築いた堅牢な城門だったものが、第Ⅱ期には屋根に瓦を葺いた壮麗な造りで門幅も 11.5m に広がり、防御よりも外見を意識した構築物に変化したようである。



水城西門

金田城 南門

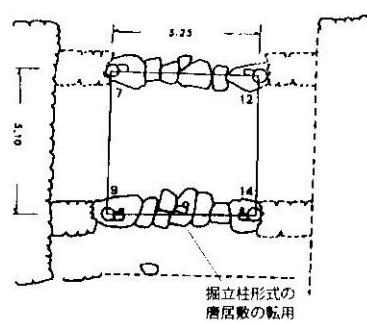
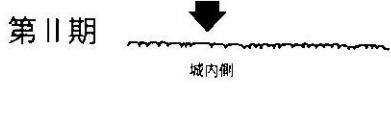
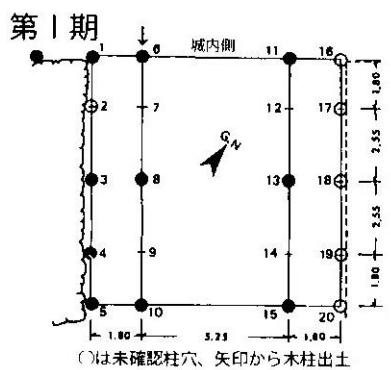
石墨による城壁が周囲を囲繞する金田城には「城戸」と呼ばれる三つの城門の他、新たに確認された「南門」や、内部の土墨に付隨する「ビングシ門」がある。

南門の発掘調査では、間口 1 間、奥行 3 間の礎石建物跡が見つかった。城外側から 2 つ目の柱列に扉の軸摺穴がある。側壁には石積みが行われ、床面はすべて石敷である。門の外側から門道部分にかけて階段が構築される点が大きな特徴である。二ノ城戸門では間口 1 間、奥行 2 間の礎石建物跡である。城外側の柱列に軸摺穴があり、床面は石敷を行う。

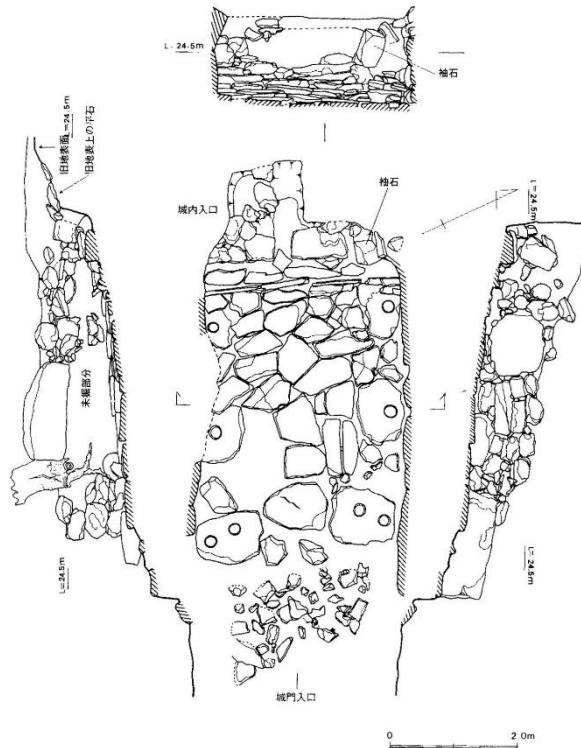
門の種類・構造・幅の事例

内容は各報告書・論文に基づく

大野城太宰府口城門 第 I 期・平門	掘立柱（3 間×4 間）	円弧状削り方 方立穴・円形軸摺穴	5.25m（柱間）
大野城太宰府口城門 第 II 期・平門	礎石（1 間×1 間） 瓦葺き	円形柱座 方立穴・方形軸摺穴 蹴放石列	5.25m（柱間）
大野城太宰府口城門 第 III 期・平門	礎石（1 間×1 間） 瓦葺き	円形柱座 方立穴・方形軸摺穴 蹴放石列	5.25m（柱間）
大野城水城口城門 懸門	掘立柱（1 間）	円弧状削り方 方立穴・円形軸摺穴 蹴放材嵌め込み溝	3.8m（軸摺穴間）
大野城北石垣城門 懸門	掘立柱（1 間）	円弧状削り方 方立穴・方形軸摺穴	4.1m（柱間）
大野城原口城門 I 期	掘立柱（1 間） 門外に石敷・石垣	円弧状削り方 円形軸摺穴	約 3.6m（柱間） 門礎石 II 期に転用
基肄城東北門	掘立柱（1 間）	円弧状削り方 隅丸方形軸摺穴	約 1.9m
金田城南門 懸門	礎石（1 間×3 間）	円形軸摺穴（排水溝）	2.38m（軸摺穴間）
金田城二ノ城戸門 懸門	礎石（1 間×2 間）	円形軸摺穴	2.8m
水城西門第 I 期 平門	掘立柱（1 間） 推定冠木門	円弧状削り方 方立穴・円形軸摺穴	4.2m（柱間）
水城西門第 II 期 平門	礎石（3 間×2 間） 推定瓦葺き八脚門	方立穴・円形軸摺穴 (元位置から移動)	推定 4.5m
水城西門第 III 期 平門	礎石（3 間×1 間？） 推定瓦葺き樓門	方立穴・円形軸摺穴 (元位置から移動)	5.4m



太宰府口城門の変遷



金田城二ノ城戸門